



中橋鶴峯著

語學新書

全

一名西洋仮字必讀

東都書林

文岳堂櫻



利
493
門
號
卷
454

刺語學新書序
予寒鄉鄙人。於文學毫無知解。然人
心之靈。莫不有知。敬謹敦厚。吾知其
可尚矣。貧。涵。殘。詐。吾知其可戒矣。乃
知鶴峯先生之能導人於學。嘗與從
兄。易信相共從之。先受其語學矣。蓋
以其所聞曰。琢玉者必治錐鑿。學文
者須明語法。不解語法而脩辭。猶無
錐鑿而琢。何能成器邪。夫性靈所鍾
秀氣成采。

明治元年八月六日

醒

爲

贈

皇華言辭傳於天上。聲韻清朗。品格精密。貴賤男女。平生語言。造次顛沛。莫有所違。海外使人。至驚嘆以為奇事。不亦宜乎。然至其施諸漢字。則自非併語法之與字格。而能熟滑焉。不能莫錯謬也。於是古博士家之學。建助辭法。以無憲章。孰不遵此。後世儒者不事語法。讀書作文。不辨主客。豈唯言見賢變色。犬馬養人類哉。良可嘆矣。印度有八轉聲。十羅聲。遠西有

十品四格。與我語法。雖精粗不同。其義不相戾。鉛槧之士。不可不知也。我先王求美于野。百家之學。莫有不備矣。而如夫八轉聲。原是訓語之法。漢譯唯傳其義。而失其音。至十羅聲。則音軌俱无傳。而我所求。唯在漢譯。是千古人之所以不能悟其法也。物子解書殊多牽強矣。而如論其文法。以形狀作用聲辭物名四者為準。稍可庶幾於語法也。至法住師著攝八轉

義是亦固有所未盡。而論楚則者。舍此書將取何書乎。同時本居富士谷二公起。而專論歌文助辭。繼志築藤林諸氏出。而盛譯遠西語書。文運既動。語法將振焉。唯恨其親彼者。疎此親此者。疎彼而未嘗聞有合彼此而大成者矣。鶴峯先生學極字內。識洞古今。折中諸家。而著語學新書。劈肌分理。沿波討源。證據的實。昭然可鑑。豈非合彼此。而衣被學人者哉。予於

文學毫無知解。亦知斯書之宜傳不朽。因與同門諸君相議。遂請以刺諸梓。敢題此語爾。
天保四年癸巳仲春

參河 島田易清謹識

白杵藩河村脩絲 書



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in a single column, starting from the top left and moving downwards. The characters are highly stylized and interconnected, characteristic of cursive handwriting from the 17th or 18th century. The text is written on the left page of an open book, with the right page being blank and framed by a double-line border.

in the name of the Father, in the name of the Son, in the name of the Holy Spirit, in the name of the Lord Jesus Christ, Amen. I believe in one God, the Father, Almighty, Maker of heaven and earth, and of all things visible and invisible. One Lord, Jesus Christ, the Son of God, Begotten, not made, of one substance with the Father, God from God, Light from Light, true God from true God, who by the Holy Spirit was conceived in the womb of the Virgin Mary, and born of her, and came in the flesh, and dwelt among us, and was full of grace and truth, who gave life to all who believe in Him. He ascended into heaven, and is seated on the right hand of the Father, and will come again with the clouds of heaven, to judge the living and the dead. His Kingdom shall have no end. Amen.

我信全能的父神，创造天地万物之神。独一的主耶稣基督，是神的儿子，是神所生，不是所造，与父同本质，由父所生，光从光，真神从真神，由圣灵成胎，在童女马利亚的子宫里，降世为人，住在我们中间，满了恩典和真理。祂为凡信祂的人赐生命。祂升天，坐在父神的右边，将来带着云降临，审判活人和死人。祂的国没有穷尽。阿门。

Handwritten text in cursive script on the right page. The text is arranged in approximately 11 horizontal lines, starting from the top right and moving towards the bottom left. The ink is dark brown or black, and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in cursive script on the left page. The text is arranged in approximately 4 horizontal lines, starting from the top left and moving towards the bottom right. The ink is dark brown or black, and the paper shows signs of age and wear.

於海也。有書。秋海。大張下の。有て。海
河。中。在。鏡。水。及。冬。独。あ。つ。た。雪。す。り。海
水。を。受。つ。た。り。と。あ。よ。く。米。を。増。す。菜。に。
魚。は。味。が。平。下。此。所。に。生。れ。は。魚。物。之。形。
其。の。立。目。人。事。も。海。に。付。て。有。り。海。に。海。水。
新。の。形。天。竺。西。屋。上。阿。羅。漢。何。之。舞。の
七。心。の。舞。其。時。候。文。字。の。形。其。之。形。

又進はのりし如くは。人として雖も可なり
 之れはく生たむ。おしにじのふる多
 今よりやうやう和れよ。よむに程廣う
 後ひきよ。思ひに世の中あり。儒佛乃ち
 亦り安んず。何れも元来の心あり。あはれ。そのこと
 笑ひておしひく事。海舟ウチボネのこと。とちたるを
 多し。辨るをあたると。あし。はしウチボネの事あり。

千人走んや。教へておし。世の中あり。其の事
 あり。かた。いづれも道なき者あり。かたは
 又。よむ。世の中あり。此の事あり。其の事
 太古國の事。世の中あり。此の事あり。何
 よ。かた。世の中あり。此の事あり。其の事
 あり。世の中あり。此の事あり。其の事
 也。されば。後学をせよ。世の中あり。其の事
 也。されば。後学をせよ。世の中あり。其の事

倂。華解。非。倂。詩解。能世倂。程於倂。

阿。いふ倂。おぼく。と。あまを。さたつ。新

新を。志。い。て。志。い。つ。見。世。を。い。その。色

純。倂。去。と。起。その。あ。あ。い。これ。倂。学。の。力

大。也。也。中。橋。鶴。峯。翁。ハ。儒。学。ト。韻。学。ト。

業。学。ト。何。之。解。け。と。と。私。あ。案。て。持。懐

此。も。と。れ。く。也。倂。倂。語。有。の。除。可。也。倂。

子。物。の。い。た。能。也。倂。学。新。去。を。復。案
て。手。あ。も。あ。倂。純。倂。去。と。起。その。あ。あ。い。これ。倂。学。の。力
大。也。也。中。橋。鶴。峯。翁。ハ。儒。学。ト。韻。学。ト。
業。学。ト。何。之。解。け。と。と。私。あ。案。て。持。懐
此。も。と。れ。く。也。倂。倂。語。有。の。除。可。也。倂。

こゆるまに。あふれおがきまのまじり。あ
あんど。きく^{ハ、ロ、}試ては。とれりあがく持。天保
四年上元日。松屋主人平小山田與清序。

あふれおがきまのまじり。あ
あんど。きく^{ハ、ロ、}試ては。とれりあがく持。天保
四年上元日。松屋主人平小山田與清序。

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, written on the right page of an open book. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines, filling most of the page's width. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, written on the left page of an open book. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines, filling most of the page's width. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written vertically on a page with horizontal lines. It appears to be a formal document or a significant piece of correspondence.

戊申

此志を汝の言ちせうり。そとられたびやどうあるむ。

おぼろたむたむの

序

〇三

此書を何れの品定と名づきて九品又九品に格を附録又二巻を
 べて二十巻を以て撰りてハ其業のその勝字をたやそりてハ同盟
 あひせりてつひに師ふらひて本書に志を節して二巻とす
 つかざるをあらためて語学新書といはせり
 ○師いそく天地の事一切を撰りて二天の創業志を所す
 中にも言語の事れを撰りて神世の古訓もあまよりて傳はり
 聖人の名教もあまよりて流きたり天下古來語法をいふもの
 皇国は帝尔乎波あま漢韻法整字法あり梵は八轉声十羅声あり蘭
 又十品四格ありと云これ前聖の究理もあて言語文字は品格を
 及びちよりて申語名を以て諸家を折中し論定して九品九格と
 世間を量りて貴賤男女老幼を以ての則又順ぐひ平生の語を
 呼びよく應へ差ふ所あることあり又其格を失ふものハた初
 学脩辭の習もあるものもなだし平云ハ天工もあつ故又差錯し脩辭
 乃如きハ人為よおづ故又謬乱あるべし或は申學者をして謬乱の弊
 ありと云めんとたれめかゆ多は語法を講ひそき諸子百家の書ひと
 つかして語をあらざるをれり云々これに語を以てこの格式あ
 ると云ハ書を讀みん人辭を脩めん人あざりこれをまをばざらん
 ○師いそく天下れ語かきこき同じくされども言語の別ハ二等
 又ハ色ざりてそハ一つ又ハ訓語二つ又ハ韻語を以て五大洲

序説

一

の中、韻語あるハ漢と字とのみよてこのなりハ皇国より印度諸
国は動もあてし訓語なりその別ハ二等はわたりぬりぬりいへど
もその語法は控ていとものに一種よりて其法は一つよりて二つあ
ることぬり物も漢籍を讀むよりきハ從頭直下おきハ順逆廻環を
るよつよて世人ハいとく異様なるやうよわりのことよきとそい
かこみよなることよてころに漢人ハ訓語の書をよまふ免ハ
うあり、廻環の讀まてこそ其きをハあきよふも、變ハ巴明人の
此方ハ歌詞を註するがめ、讀法ハ阿氣那塔那華里復那一屋那め
て、切立ハ秋田収稻結舎者守あるがめしよ、廻環の讀ハ嫌あら
バ、をべうく、塾字を控し漢音二音便ハ從グ直讀をべしよ、さきど語
法をまぬをハその塾字をハあきよふきとく、さるべし、そも、語
法ハ、言語文字ハ名派を正を、名を正をハ仲尼此言終ことを
思ふ、此學をさく、世の學者たちの講出作文よ、よ、譯安のあることハ他
而二字ハ連まりて、學字ハ去活用、而字ハ速及接續云と、去、時
習之三字ハ連まりて、時字ハ時令形容、習字ハ現在活用、之字ハ
再說代名、之と去、タケ、めし、し、是、等、此、字、各、連、ふ、は、各、分、離、セ、バ、
ふ、不、人の裸伴よて箕踞したらんがめ、く、その士よ、農た、何を、て
り、あ、つ、ふ、よ、と、あ、と、ハ、連、續、した、り、や、も、を、一、語、法、を、あ、く、を、ハ、時、習
の、時、も、使、民、以、時、の、時、も、ひ、と、ら、よ、ふ、り、ひ、よ、く、て、ん、さ、れ、バ、衣、冠、ハ、人

の中、韻語あるハ漢と字とのみよてこのなりハ皇国より印度諸
国は動もあてし訓語なりその別ハ二等はわたりぬりぬりいへど
もその語法は控ていとものに一種よりて其法は一つよりて二つあ
ることぬり物も漢籍を讀むよりきハ從頭直下おきハ順逆廻環を
るよつよて世人ハいとく異様なるやうよわりのことよきとそい
かこみよなることよてころに漢人ハ訓語の書をよまふ免ハ
うあり、廻環の讀まてこそ其きをハあきよふも、變ハ巴明人の
此方ハ歌詞を註するがめ、讀法ハ阿氣那塔那華里復那一屋那め
て、切立ハ秋田収稻結舎者守あるがめしよ、廻環の讀ハ嫌あら
バ、をべうく、塾字を控し漢音二音便ハ從グ直讀をべしよ、さきど語
法をまぬをハその塾字をハあきよふきとく、さるべし、そも、語
法ハ、言語文字ハ名派を正を、名を正をハ仲尼此言終ことを
思ふ、此學をさく、世の學者たちの講出作文よ、よ、譯安のあることハ他
而二字ハ連まりて、學字ハ去活用、而字ハ速及接續云と、去、時
習之三字ハ連まりて、時字ハ時令形容、習字ハ現在活用、之字ハ
再說代名、之と去、タケ、めし、し、是、等、此、字、各、連、ふ、は、各、分、離、セ、バ、
ふ、不、人の裸伴よて箕踞したらんがめ、く、その士よ、農た、何を、て
り、あ、つ、ふ、よ、と、あ、と、ハ、連、續、した、り、や、も、を、一、語、法、を、あ、く、を、ハ、時、習
の、時、も、使、民、以、時、の、時、も、ひ、と、ら、よ、ふ、り、ひ、よ、く、て、ん、さ、れ、バ、衣、冠、ハ、人

序説

〇二

語法多し、子少年の學術より、あつたて、おわが、天のたまは、
皇國人と、白髪、い、る、あ、で、讀書、通、せ、み、を、ハ、の、あ、の、へ、
ら、つ、け、ひ、の、あ、を、お、き、お、へ、ら、の、あ、の、ハ、い、う、ま、そ、や、ま、
と、お、少、時、語、法、を、學、ば、さ、ら、が、ゆ、ゑ、の、つ、ま、ま、う、れ、外、國、學、術、の、あ、
ひ、ま、ま、を、ま、ら、へ、て、も、お、の、お、ひ、の、た、め、ハ、あ、ら、は、あ、ら、は、語、法、を、
ま、ま、と、い、ふ、ま、ま、を、ま、ら、べ、い、古、代、博、士、の、學、風、も、あ、ら、は、あ、ら、の、
と、や、

○師、い、と、く、西、洋、の、文、字、を、や、天、竺、よ、り、出、た、り、と、り、ハ、亞、辣、比、亞、人、の、
説、多、り、や、い、つ、り、と、れ、バ、ラ、空、別、泄、二、十、六、字、ハ、右、行、伽、書、二、十、五、字、ハ、
流、り、て、十、品、四、格、の、如、き、ハ、轉、十、羅、又、原、本、を、る、れ、ま、ら、し、
○師、い、と、く、帝、尔、半、波、ハ、元、來、古、傳、士、の、助、語、本、が、り、あ、て、そ、の、法、精、
微、り、て、語、法、を、り、め、の、正、を、取、る、に、お、け、に、申、す、こ、れ、又、い、つ、
よ、て、語、法、を、講、ず、る、こ、と、を、え、り、ま、ら、し、体、用、二、言、の、く、助、辭、あ、り、
て、ま、ま、件、云、の、助、辭、ハ、能、所、の、別、あり、能、所、ハ、ま、ま、君、臣、の、ご、と、し、て、用、
言、の、助、辭、の、あ、ら、は、能、格、を、結、ぶ、こ、と、を、民、の、君、王、又、仕、奉、ら、が、あ、ら、
帝、尔、半、波、の、名、ハ、君、臣、民、の、三、つ、を、總、括、を、る、よ、り、其、法、ハ、既、に、詞、鏡、又、
あ、ら、ハ、せ、ら、る、が、め、し、う、の、鈴、屋、翁、の、紐、鏡、の、如、く、ハ、帝、尔、半、波、法、カ、一、の、書、
也、り、い、ふ、な、ま、ま、と、も、君、と、民、と、あ、ら、い、つ、を、あ、り、て、い、ま、ま、臣、あ、ら、こ、
と、を、あ、ら、い、つ、の、能、主、格、君、位、の、辭、ハ、カ、一、等、ハ、波、毛、と、徒、と、を、置、カ、二、
等、ハ、叙、乃、也、何、を、置、カ、三、等、ハ、許、曾、を、置、カ、ま、て、別、に、變、格、を、設、け、ま、ら、
と、

今、成、申、が、あ、ら、つ、ら、ら、に、ハ、カ、一、波、毛、カ、二、叙、乃、也、可、カ、三、許、曾、と、定、め、
て、徒、と、何、と、を、刪、去、せ、變、格、を、な、し、お、と、ま、ら、し、ま、そ、の、な、り、む、き、ハ、一、つ、を、
並、と、し、そ、の、あ、ら、つ、ら、ら、ハ、い、ハ、か、の、づ、く、ら、い、つ、を、あ、ら、べ、し、ま、ら、北、邊、
翁、の、脚、結、抄、ハ、五、屬、十、九、家、六、倫、十二、身、八、隊、あ、ら、ち、て、言、辭、の、
品、格、と、あ、ら、つ、ら、ら、い、ら、ま、ら、し、い、つ、の、い、ま、ま、カ、二、品、カ、格、
の、く、り、き、に、い、れ、よ、ら、ま、ら、し、と、ん、師、説、を、あ、ら、い、い、ま、ハ、そ、の、
ひ、ま、と、あ、ら、を、と、り、て、此、書、の、卷、首、に、お、の、の、ら、し、



凡例

凡テ語学トハ言語文字ノ品格ヲ学ビ知ルヲイフナリ。然ルニ文
 言語ニ從フモノナレバ先語法ヲ弁ヘ知ルヲ要トスルナリ。言語
 格アルハ譬ヘバ猶人倫ニ王公將相卿大夫士庶人ノ品別アルカ如シ。
 鏡ヲツカセタルヲ士ト知リ、鋤ヲモクタルヲ農ト知ルハ人品ヲ定ム
 ルモノナリ。言語文字ヲバ熟語熟字ニヨリテ其品ヲ定ムベシ。文学ニ
 コ、ロザス人此法ヲ知ラザルトキハ必ズ其讀書作文詠歌トドノ間
 ニ於テイミジキヒガコトイデキタルモノナリ。スベテ助辞法假字格
 ヲアヤマル類モ此法ヲ学バザルガ故ノ弊ナリ。鉛槧ノ士トシテ知ラ
 ズハアルベカラズ。
 ○凡テ言語ノ品格九品九格ニ分ル。人倫ノ品格モ能ク推ストキハ必
 ズ九品九格ナルベシトナシ。九ハ數ノ極ミナレバナリ。
 ○凡テ九品トハ第一実体言、才二虚体言、才三代名言、才四連体言、才五
 活用言、才六形容言、才七接續言、才八指示言、才九感動言ナリ。九格トハ
 才一能主格、才二所生格、才三所與格、才四所役格、才五所奪格、才六呼名
 格、才七現在格、才八過去格、才九未來格ナリ。
 ○才一実体言トハ國都山川霜雪人畜トドノ如ク実物アル体言ヲ云
 ナリ。其中ニ白、黒、長、短、大、小、高、下、遠、近、多、少、速、遅、強、弱、剛、柔、
 干、実、体、言ノ類ナリ。又コレニ統稱各稱ノ二等アリ。譬ヘバ山人ノ類ハ
 統稱富士山人まろノ類ハ各稱ナルガ如シ。

凡例

一



○亦四所役格トハをト云助辞ノ格ナリ
 ○亦五所奪格トハよりクヨクヨト云助辞ノ格ナリ所格ハ猶臣ノ如シ
 ○亦六呼召格トハよややよいでト云助辞ノ格ナリ是ハ客位ノ助辞
 ナリ以上六ツハ体言ノ助辞格ナリ
 ○亦七現在格トハ物リらんベキらんトド、現在用言ヲ受ル助辞格ニ
 ○亦八過去格トハてたりたりんつあつ、きあ、ぬあ、ん等ニテ全
 過用言ヲ受ケ、バド、トドニテ未過用言ヲ受ル助辞格ナリ
 ○亦九未來格トハむでじぬんま、バ、あ、んトドニテ未來用言ヲ受ル
 助辞格ナリ以上三ツハ用言ノ助辞ナリ
 ○凡テ本書ヲ讀ム心得、タマシ、解シ難キトコロアリトセソレハソレニ
 シテ、先一過讀ミ畢ルコトヲ要トスベシ、一過讀ミ畢ルトキハ、オノツカ
 ラ其義ニ通ズルモノナリ、譬ヘバ、実体言ノ條、統稱、实体言ノウキニ、一
 名、統稱、日、類、二名、統稱、書、類、多名、統稱、光、類、トアルカ、如キ、日ト云モ、書ト
 云モ、光ト云モ、コレミ、十、实体言ニシテ、其实体言ノ中ニテモ、統稱ニ属
 セル辞ナリト知ラバ、一名、二名、多名、等ノ義ハ、捨置テ讀ムベキナリ、一
 名、二名、ナド、イフハ、猶、一字、名、二名、ト云、ホド、ノコトナリ、マ、タ、日、書、光
 等ニ、准ラヘテ、スベテ、实物アル体言、山川、草木、萬物ノ名、辞ハ、ミ、統稱、
 实体言ナルコトヲ知ルベシ、本書モト凡例ナシ、今、童学ノタメニ、コレヲ
 書キ加フルモノゾ、

九龍藩 橋山地茂 撰

目錄

上卷九品

實體言第一 分爲二等

代名言第三 分爲六等

活用言第五 分爲三等
 又有九法

接續言第七 分爲十二等

感動言第九 分爲十七等

虚體言第二 分爲三等

連體言第四 分爲三等

形容言第六 分爲十八等

指示言第八 分爲四等

下卷九格

能主格第一 分爲三等
 併結辞

取與格第三

取生格第二

取役格第四

巧奪格第五

呼召格第六

以上體言助辭六格

現在格第七

過去格第八 分爲二等

未來格第九

以上用言助辭三格



語學新書上卷

中橋鶴峯著



○實體言才一

實体云ハ、すべて一切の物に各辞ありて、漢又ハ、その

統稱実体云 是ハ、その物の總稱を以て、中又ハ、そのことと、これ差別あり。

一名統稱

日類

記上、あをやま、ひかからう、はぬをたまれ、よいいでまむ。

二名統稱

晝類

記中、うきびやま、ひるは、めの、ゆの、せば、うむと

多名統稱

光類

古春、られ、日乃、ひう、日又、ある、あき、れど、かし、られ、ゆす

一義統稱

月類

古秋、つき、見、バち、どの、こゆ、あが、アひ、と乃

二義統稱

月夜類

古秋、つき、夜、ハま、ぬく、ある、かた、くり、ある、ある、ある

多義統稱

月人男類

万、天、海、月、船、も、う、う、う、ぢ、う、まて、こ、ぐ、見、ゆ、月、人、壯

上卷実体云

才一統称

獸類 古長くを里々うせらるる事をものこめてるえんゆちして
式祝詞山に住るのハ毛能和物毛能荒物

才二統称

駒類 右慈ちてといふは祐てゆりぬき志ひてゆく
をれまへるふらしこハ獸の中よての統称也

才三統称

黒駒類 雄畧紀ぬむたまれうひの矩盧古磨くくませい
のち志ふましくひめころこほこハ駒の中よて統称なり
都麻阿迦胡麻青駒あーげふとこま同也 此志よす名をつ

轉用統称

恨類 古序之ハあそく川の流るる
活用云よまうつりまきることむ

小称統称

浅類 源藝のささみや人ハあり
うきこひちをこハ形容云より轉てきさるる詞也

三声統称

平声類 目とり声れめし この三声の
ふても男声女声中声とりめハ仙覺が万葉抄も天を

と叫ぶハ男声めめとよハ女声といふ説なりたりこハ悉談
の説よとせらるるのときこの漢ハハこの三声ハ入声を加へて四
声といふよア清の毛奇齒韻字指要ハ至魏時李登始取其声之
同者而分聚之名曰声類然而猶無四声也及齊中書即周顒著四声
切韻而梁沈約傲之因之有四声類譜之作夫然後就一類之中而又
分四等といへる是をその三声を四声やしたるゆえハ漢人の
声ハ長と短と二つありて其長短ハ各三つの差別あるを長声の
方のを三つに分きて短声をハ一つは渾じて入声と志らる
てのひめてゆきバ実ハ三声をまきて是ハ万国の声ふも此三つ
の差別あることをさとひまて万国の三声皇国は同じといふ
よハあはれまありひまて

一云統称

女類 記上吾ハめめり
まハ

二云統称

少女類 記中袁登賣まめまあハむとあがさけらとめ 又ひめ
くりめさかめちとこのめくひとを志し

多云統称

少女等類 万一ハこれうらふ子の里をらんをとめらたまも
のそせに志らつらん 土左日記うらふら類

同也又記中あゆく袁登賣杵母 續紀世頃者王等臣等乃中
尔無礼逆在流人止母在而 万廿若草之都麻母古騰母毛と也
上も実件云

才一統称

獸類 古長くを里々うせらるる事をものこめてるえんゆちして
式祝詞山に住るのハ毛能和物毛能荒物

才二統称

駒類 右慈ちてといふは祐てゆりぬき志ひてゆく
をれまへるふらしこハ獸の中よての統称也

才三統称

黒駒類 雄畧紀ぬむたまれうひの矩盧古磨くくませい
のち志ふましくひめころこほこハ駒の中よて統称なり
都麻阿迦胡麻青駒あーげふとこま同也 此志よす名をつ

轉用統称

恨類 古序之ハあそく川の流るる
活用云よまうつりまきることむ

小称統称

浅類 源藝のささみや人ハあり
うきこひちをこハ形容云より轉てきさるる詞也

三声統称

平声類 目とり声れめし この三声の
ふても男声女声中声とりめハ仙覺が万葉抄も天を

又夏のらゝのらゝもこの多云統稱の多くひふれんじ。
漢語学徒先輩兒曹のたも多らへつてし。

配合統稱

日月類 延喜竟冥日月のりく星のやど里ハうハふとも。かみど
これやうあせども春の月秋の月あどやうに中間マの
ら。漢語まても日月山川酒食農工商賈あどハ配合統稱マして
北辰遠方餽羊木鐸聖賢入賢人あどハ虚伴云の格ことゑ後し。

各称实体云

国都各称

吾妻類 古羈旅注あづまのうへととそらひとむせりあさて
吾妻類いぞあひていさくを三河必ハ樟のりめあせほよのそ
身毒国の終。 論語齊魯魯儀 史記西南夷傳或聞四西可二十里有

奈良京類 古羈ち川をよまうづらもちにあつた京にやどり々
周紀而周復都豐鎬 貨殖傳然邯鄲赤漳河之間一都會也。

山川各称

四極山類 古大欽志とらむうち出て八雲ハあまゆみの後さぎら
るふふあしそさき 封禪出禪太山下趾東北肅然山

神廟各称

寺觀各称

神仙各称

人物各称

器財各称

隅田川類 古羈旅詞むさしれあしとるつふさのあまのさうに河
河渠書天子乃使汲仁郭昌發卒數万人塞瓠子決。

賀茂社類 古 ちハあぢめかそのわしろの姫こ松美代ふともを
西大寺類 古羈西大寺はるのりやまぎをよめら。

進男命類 古序ひさうとれあめあてハ下照姫よとどほりあ
かき地よりハまきれをの余よどぞおかり々々。

封禪書十一月辛巳朔旦冬至昧爽天子始郊拜太一漢又太一とい
ふハ吾天之御中主神あありてをまハち各称をり。

人麻呂類 古序ひとまろハあうひとカみまろむりうとく赤
人ハ入まろが下にまろことかこくまんあり々々。

高祖紀呂公曰臣好相人相人多兵無如季相高祖姓ハ劉名ハ季子

器財各称

万葉集類 古羈詞貞觀法時まんえうまうハい川をうり作るぞ
草薙劍類 神代紀一書曰本名天葦雲劍云至日本武皇子改名曰草

上卷実伴云

枯野類 記下 からぬを志すやまき志かあま里ことまつりかき

禽獸各稱 命婦松毛登類 松草子異本うへまきあらはねこハかうがりの

項羽紀駿馬各驢常騎之の松ををらへあるべし 又金太郎い

小稱各稱 小黒崎類 右在秋をころぎ記みつのこ侍の人あつ巴都の佐とみ

三声各稱 上声類 記上 次成神岸比地迹上 去声類 記上 次妹須比智迹去神

平声類 記上 平声を註せざるハ平声ハ常の声をばま終べし

複稱各稱 忠安寺類 古序あつと終つうゆら 史何等驃騎寺 繇王居股

配合各稱 大汝少彦名類 万三 堯舜 舜禹論語

○虚体云第二 虚体云ハ実体云ハ附属して其深淺輕重あつ形形容を

副上虚体云 コハ判をき或ハぬある等の韻をふみて体云の上ハ附属する辞

幾韻副上 深心類 右意をけあつきこえぬたぐ乃ふうきを人ハ志す

准幾副上 深淵類 和名土佐国香美郡深淵布加不知こせらふうきふちの義

倍幾副上 可見君類 右離別胡ま々又見べき君と一松まきバ思ひまめるま

奈幾副上 無水空類 右雲さくら程むをちりぬの風の子ごり又ハあまをた

志幾副上 新年類 古大秋あつし記まれをぬにかうこそ子手をうね

志幾略幾 空煙類 右誹諧ぬじれ松のあつぬ思ひよりえバのえ神ごまきこ

幾幾副上 不可寄川類 書紀よりまき川のくはへ 原氏とゆまきすち

又荷花け世又ハすこも尼まき松雲ち思くあつんこぞかき

上巻虚体云

不奴副上 不孝秋類 古秋孝子が折てかきこむ氣はるかいせぬ秋のひと

邪苗副上 不咲花類 古妻たるれとれいとりのいぬ星ハあらじさなるは 始皇紀度不滅者久之

奈苗副上 常磐松類 右春と花をぬる松のみどりも妻とるバそいとくわね 上林賦捷垂條踣稀間

すべて副上 虚体云此まきまきおきおき不ぬさるる等ハオ 二能格その也加此法比とある辞之但法比と多経時ハうあは 件云をそまきてきま格之もとひ下又件云ありてもそれはい そいざしてきまきまおとへバ右を妻上山たりそ人そ花さめ ぬさるる花とある副上 虚体云めしやの法比と多経時ハ同春下 あとあふバさくはやハあらぬさるらささとよりてきまかご としらく法比とありてきまを比較虚体云といふ此切ると と切まざるとの別ハ先達の説も忍えられども云語の品格よ よらざる論ゆふとらぬめまこくこめらざるあり

轉用副上 殿造類 右序は殿ハうべもとみまらけき草れとつをよつらよ 後之形見類 右美屋のちまよひのくこみよ所生格比のをつき

生格副上 殿造類 右序は殿ハうべもとみまらけき草れとつをよつらよ 後之形見類 右美屋のちまよひのくこみよ所生格比のをつき

員數副上 盛類 右物名それのといひくこまきともかこきとぞ 孫吳傳 萬弩俱發

副下 虚体云 色ハし或ハまじれ韻をふきて件云の下又附属を辞さてう絲 活用云を形容する格之形容云の條と見合まべし

志韻副下 川風寒類 古羈旅部いでく々かこみよ魚いづみうは川風寒し衣 倉公傳有間而身寒 河渠書昌收多

奈利副下 風速也類 右急なりへり定にのこしてあらくくハあわら山の風 琵琶行 門前冷落鞍馬稀

員數副下 心一類 右心いせの海よはせをあらあひれうをまきやあてろひと 項羽紀 如是者三

比較 虚体云 此ハ件云の助辞を或ハ履之或ハ戴きまよこいれいれいれ辞 をそへて多地を比較する辞之此又稱階比階最階の三階あり

比較 虚体云 此ハ件云の助辞を或ハ履之或ハ戴きまよこいれいれ辞 格三階の法比とある辞ハこまこれ又属する事とらるる

稱階 比較 稱階とハかよてそりくろふら幾んば中能格の助辞を戴く辞 ハミを其能格の法比と多格之能格とハ波毛叙乃也加許曾

上卷上虚体云

履波称階

白波類 風俗かひびに之呂支波事つ也。すべてハ初そのやり
陽貨不曰堅乎磨而不磷不曰白乎涅而不緇

戴波称階

波無類 在色あてはれこれつれまくえし別よりあつきせり

戴毛称階

毛無類 在冬家常いゆきありてみちりきみはけてとあ

戴叙称階

叙悲類 在物名うつきとれうういさぐとよびれどもぬれゆ

戴乃称階

乃無類 在色ひとりしてのををわへハ秋の因れいあせせよ

戴也称階

也迅類 在去とやとれとまやかそきききききききききき

戴加称階

加無類 在色人老りるふろそあやそあききききききききき

許曾称階

許曾悲類 在秋月これバちりりのこそおんまきあがひとつ

又あの中又右今ときみかうきとありまき 後撰日れぞよる
べもまきむちせし 新後撰れとよこそふくとまきあがひとつ

自毛比階

自毛悲類 在哀傷とあををたきうてわうるるもよりもまききき

自波比階

自波可住類 在古難山おやハ物のさびしよことと持をあまのうた

比階比較

比階とハ此を彼よりうへ彼を此よりうへをわらうあうあうあ

上巻虚伴云

衛灵公民之於仁也甚於水火 李斯傳故詆莫大於卑賤而悲莫甚於死困
 最階比較 最階とハそれより更にこれを言ふる義よりはるかに
 自殊最階 自殊悲類 古語志を言ふとあやふのつらめくにあり
 甚最深階 甚最深類 古語詞をえ此内入ぬりよりはるかにあり
 最甚最階 最甚深類 古語よりをへてを言ふ事とをいふ事とあり
 深孝系實天后哭極哀 呂后紀計所以安社稷甚深 晋之王遇普
 公子至厚 趙京婦人異甚 留侯系誰最甚者

○代名云才三

代名云ハ統稱各稱等の各辞より用ある辞とあり
 人名代名云 人名代名指再説疑問沈称の六等あり
 人名不定人名復称人名此五等あり

才一人名 吾類 吾類ハ「吾」の字よりくる物あり「吾」ハ「我」をいふ俗語よりくる物あり「我」ハ「我」の字よりくる物あり

才二人名 汝類 汝類ハ「汝」の字よりくる物あり「汝」ハ「君」をいふ俗語よりくる物あり

若而再乃汝是此字と才二人名と西乃又同じ女ハ汝
 上卷代名云

又同じやと子足下のたぐひも同じ。
袁暉傳司馬夜引袁盎起曰君可以去矣吳王期且日斬君盎弗信曰
公何爲者司馬曰臣故爲從史盜君侍兒者盎乃驚謝曰公幸有親吾
不足以累司馬曰君身去臣亦且臣辟吾親君何患之也君ハハハ
如公ハソコモト也。張儀傳始吾從若飲我不盜而壁若答我若善
守函國我顧且盜而城これハ若汝而を書きけり。孔子弟子
見天子半。陽貨來予與再言。始皇紀閻樂前卽二世數曰足下驕
恣誅殺無道天下共畔足下足下其自爲計この註又羣臣庶相與言
曰殿下閣下足下侍者執事皆謙類といへり。是らもて才二人名を
たとひべし。

才三人名

彼類 右序あるべきとこをう體えるところえぬところをうひ
ふまひあるふくはうれとりの辞をこれといひうのとい
小辞とこのといへりそのふえあるをう。
憲問彼哉彼哉 項羽紀縱彼不言籍獨不愧於心乎
彼家類 右哀傷伺慕系敏於躬はれ男婦くみたる時ふよみてか
ののかりんよのむうかこせりける多とれ是らこそ古今
の辞もてあひかをじ。
先進是故惡天傍者 魏武傳杯酒責望陷彼面賢
上のわれ汝ハ自他のらぢめあらよてまで男女中ハことハらぬ

不定人名

人類 右俳諧室らきぬあさよ此山乃あさやや人のを忍てこ
そのまめこの人のむハワレガ公とりのよ同じく自他ハ涉
る辞ふれば不定といふ俗語もあまのり辞也。
陳丞怒入固有美好陳平而長貧賤者乎
吾自類 大和也徳たのれひとりようんこハ人名代名を重ぬ
てりあり俗語もてワレガジランニなどりあがごとし。
憲問天子自道也 權甘傳去我身自請之而不肯汝焉能行之

配合物名

我君類 右契我君ハ子也又ハ子也又さびき石れいそとありて
若のむをまで。汝身吾大と神ぞとみも同じ。
公治長唇黨之小子 秦伯啓予足啓予手 雍也再鄰里鄉黨 田
叔傳主非若主邪 袁暉傳吾與而兄善

獨立物名

乃類 右序まんえうあうにのりぬあさきうのみづうのをも替
らるる終ひてさむ。好忠集人妻と家のとあうのあはハ
されこし神ハあそれまされりこれられのりぐミを上のあつま
あど此代辞とありてさてその物をハ離れて獨立たり。万十

上卷代名云

八志をさうするもの君のとはお此のあども獨立物名の一つれ
 格を終べし。まゝ新古格をわが神ふきしあひひぞと妻をむら
 しの厚まどとやこい古意月やあらぬ妻をむらむら此妻あらぬ
 とあひひ款を終てよめるよて獨立代名此のゆゑに本款の辞
 をこ終たま。やうはのゆゑをそへてすくさ格あり新子我
 うくて君が七代はゆめさう此笑しませし死道ぞくらむ。是
 ハ古離別お板の笑しませし死のゆゑをそへてすくさ
 めらよて笑しませし死の下にのゆゑをそへてすくさ
 賀類 古秋詞このうといある人のいそくさ此ゆゑの人まら
 賀類 同雜詞五節此あしふかむさし此むのちさうり
 る成てしてはむらむらあひひてよめる。又同雜詞此中
 づきうけしてはむらむらあひひてよめる。又同雜詞此中
 同じ。まゝ方三といへど志ひる志斐のむらむらさうりハ志
 斐ノリナタカシヒガタリ此さ。十四世子のむらむらさうりハ志
 しつハセ十ノ君ガ袖モといひまよてまをまをめめふめ
 せさるぬるべし。まゝ古意むらむらこのむらむらままむら
 人をさふともさうと思ひむらむらこのハ疑問法のゆゑていさ
 いら異之混むべし。

陽貨公山費擾以費畔召子欲往子路不説曰未之也巳何必公山氏
 之之也こまハ上の之ハ獨を物名よて上此以費畔三字の代名云
 下の之ハ未未活用云此方此儒者のむらむらさうることと
 こハ物をさうてこの何その何をさうり代辞をゆめと

指物代名云

此指物

此卷類 古序ふむらむら此の意冬あひりいまハ妻べとけく
 やこのとさ

其指物

其各類 右排階ゆらその名此ゆめゆらこのをさうりむらむらと
 ふハはれひむらむらと

再説代名言

雍也斯人也而有斯疾也 汲鄭傳此兩人中廢家貧 學而事父母
 能竭其力事君能致其身 蒙恬傳此其兄弟遇誅不亦宜乎
 こハ上の何をさうりひむら代辞さうてこれそれまここやこハ
 そよそをさうり所者同さうりの説

是再説

是類 右意形見て今ハあまこれこれさくハさうり時者ゆらま
 しもの派 金葉あさよりやこハ何むらむらまぞとよ

其再説

其類 記上今其可來時故泣 古物名ありまよりを起きてむらむら
 しよめやこれまむらむらとつをえんうし 拾遺いさやま
 ぐまてふことまらまらまらこやはらまらまらこそ福れぬ
 右意をさうりむらむらとこに 同意福れぬのそよといふ人の

學而礼之用和爲貴先王之道斯爲美 微子是魯孔兵與曰是也
 此類 記上今其可來時故泣 古物名ありまよりを起きてむらむら
 しよめやこれまむらむらとつをえんうし 拾遺いさやま
 ぐまてふことまらまらまらこやはらまらまらこそ福れぬ
 右意をさうりむらむらとこに 同意福れぬのそよといふ人の

淮陰侯傳此乃信之所以爲陛下會 呂后紀帝廢位太后幽殺之
八佞樂其可知也

者再說

者類 右雜大くハ月をも考てじこきぞこの洗りれバ人のかい
とにひて物よめりへるもきぬのあり

學而賜也始可與言詩已矣告諸徒而知來者

所再說

所類 此ハ漢籍よみの辞よたなくありて上代の文よハ終てそ
同類 孟子梁惠王下姑舍女所學 書彼祖之民の攸も同じ

同再說

同類 右秋同いをを記してこのとれうつ流ハ西アを秋のそ
疑問代名 是ハ其物をうごがひとふ代辞ありてこれハ物よあづかうと人
よあづかうとあふこさあり

非情疑問

何類 古春まてとりふちうてしとぬる物ありハ阿をらうくに
公治長曰何器也 平原君傳予秦地何如母子 敦吉

有情疑問

誰類 古秋のみち家ののて洗りぬる日かむとと誰をまつ虫こ
子罕吾誰欺と天乎 述而伯夷叔齊何人也 項羽紀客何爲者

汎称代名

すべてこの疑問代名云オニ純格の助辞ぞやう等此つくとた
ハ疑問法とそ格とわうべし

然汎称

然類 古雜和が屋ハみやこれもつと志うぞまひよをうら山とく
如是類 古意世中ハかくアそ考られふく凡のめに尼ぬ人男名

如是汎称

如是類 古意世中ハかくアそ考られふく凡のめに尼ぬ人男名
范蔡傳先生奈何而言若是

皆人類 古哀傷ミ子ハ花の衣は形りぬありこまのありやよか

皆汎称

皆人類 古哀傷ミ子ハ花の衣は形りぬありこまのありやよか
諸人類 拾遺あまこみしこよれみそぎれあろくの君し物をか

諸汎称

諸人類 拾遺あまこみしこよれみそぎれあろくの君し物をか
幾世類 古雜これんても久くありぬ位のにれまハ此姫松貴也

幾汎称

幾世類 古雜これんても久くありぬ位のにれまハ此姫松貴也
數汎称 古哀傷ミ子ハ花の衣は形りぬありこまのありやよか

數汎称

數汎称 古哀傷ミ子ハ花の衣は形りぬありこまのありやよか
この不々 各國のぬぐひまやあれぬそハとね子ぞらへて志る
べくらん

複称代名言 とハ代名言六等のなりシ

才一複称

我等類 古も後のものさきおハ 目れらが中此の時 おき
同序そまはらハ そのまをうしあやみぬる
をのより。 項羽紀吾属今爲之虜矣

才二複称

汝等類 万六よる 枕着子君どら 神奈秋のさきんどちや
はてやを辞して公等るるべし。 源氏名菜下 店 ち
駿河歌正乃者良 平原君傳 公等 録 日者傳 公之等 喝之者也

才三複称

彼等類 源標始ら比きんどちのぬぢひ 色
上林賦若此輩數千百処

○連件云才四

才四 才四云ハ活用云三世の助辞をあててさて実件云に續

現在 現在

現在 現在 の用云より実件云は續くを云云べて四段活く辞の

久現在

咲花類 古春 咲くは子ほさかみあこねきとぬれハ妻をう

須現在

人古須里類 古慈人 あささきをいこひてこかどもけうのみ

都現在

待人類 古美 人まこぬりのゆき に 言れなきハ る 花をうけて

布現在

傍み類 古難 びぬまば は 派う に 派の根を踏て さ よ あ は ら ば

武現在

任我類 古秋 花の山 に 葉 に ぬま と ぬ ひ と き は ま む あ さ へ を 枝

る現在

見人類 古秋 花 に あり に 見

久る現在

吹來風類 古秋 花 に あり に 見

須る現在

紅葉秋類 秋 花 に あり に 見

奴^ヌる過去

住世類 古雜志云此あえむとびく等又たたむめはとみぬ

多^タる過去

浮意類 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

言^カる過去

從兄弟類 古俳諧詞いとこねりたる男よよそへて人のいひなき

言^カ武過去

擊心類 古秋古ぎてまひひそけはるまきぬむの年又一とびあ

省体言格

免^メ下省体云 古春詞あもとくはまきまらる日よゆるは下

多^タ下省体云

多^タ下省体云 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

言^カ下省体云

言^カ下省体云 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

袁盎傳 盜君侍兒者

公治長喜色温色 酷吏傳 盜鼠餘皮 孫吳

傳 龐涓果夜至研木下

滑稽傳 墮理 廣鑑

右此めく過去

右此めく過去 去来体云にある過去用云ハオ二能格をのり加れ格

とありて同美上

とありて同美上を世にのりあはれとぞるしうめのそまといわ

又此めく過去

又此めく過去 去来体云にある過去用云ハオ二能格をのり加れ格

皆オ一能格

皆オ一能格はを依てまきさの格辞めてを伴云ハあきつ

語法

語法ハ未来用云より実体云又つとくをのりありあはれに西洋の

未^ミ来^キ体云

未^ミ来^キ体云 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

武^ム未^ミ来^キ

武^ム未^ミ来^キ 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

將^シ散^{サン}小^コ野^ノ類

將^シ散^{サン}小^コ野^ノ類 古秋古ぎてまひひそけはるまきぬむの年又一とびあ

高祖

高祖紀 殺人者死傷人及盜抵罪

能^ノ格

能^ノ格のそのやりとつとくをのりありあはれに西洋の

とありて

とありて同美上を世にのりあはれとぞるしうめのそまといわ

又此めく

又此めく過去 去来体云にある過去用云ハオ二能格をのり加れ格

皆オ一能格

皆オ一能格はを依てまきさの格辞めてを伴云ハあきつ

語法

語法ハ未来用云より実体云又つとくをのりありあはれに西洋の

未^ミ来^キ体云

未^ミ来^キ体云 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

武^ム未^ミ来^キ

武^ム未^ミ来^キ 古意あきつをに依てしとみぬるたまたまはるたまたま

將^シ散^{サン}小^コ野^ノ類

將^シ散^{サン}小^コ野^ノ類 古秋古ぎてまひひそけはるまきぬむの年又一とびあ

高祖

高祖紀 殺人者死傷人及盜抵罪

一人の過去に能所中より、一人一人見られん人、又一人一人ハ未来の
 能所中より、一人一人見られん人、又一人一人ハ未来の
 漢語にて高祖紀、願從者ハ現在の能子也。
 齊魯斷足子、足ヲ斷レタル者ノ子也、よび、齊魯者、妻ヲ盜レタル
 者トシ、是、是ハ去の能也。
 高祖紀、殺入者ハ未来の能也。
 子ハ能所中乃、あとい活用云、此條、まさしく、
 以上、実件云、虚件云、代名云、身件云の四品、い、子件云の、
 この四品、ハ、件云、此助辞、ハ、その、
 小より、て、轉變を、
 高祖紀、太公往視、則見蛟龍於其上。

○活用云才五

活用云、ハ、
 動他活用云、
 現在動他、
 動心類、
 陽也、
 漢王、
 現在動他、
 役格を、
 動他の上、
 見テハ、
 衛、
 今、
 格、
 待、
 高祖紀、
 則見蛟龍於其上。

活用云、ハ、
 動他、ハ、
 現在動他、ハ、
 役格を、
 動他の上、
 見テハ、
 衛、
 今、
 格、
 待、
 高祖紀、
 則見蛟龍於其上。

全動他、
 動天地類、
 衛、
 今、
 格、
 待、
 高祖紀、
 則見蛟龍於其上。

未だ動他

未だ動他ハ現在よりある義ニ未だ動他ハ古その流びとを
引けていへぬハ其の所役格を又ある格也
將留人類 古傳出てゆく人など其格也
季氏將伐顯史 高祖紀項伯欲活張良
未だ動他ハ引きたるをよらけていへぬハ其格也
の所役格をいへぬハ其格也

被重活用云

被動といふハ活ともいふハちりり活きハ小説
語ニ其格走下と云はれ此より現在より去未未あり
所責類 古冬ハおぼそけ格也
陽貨年四十而見惡焉其終也巳 公治長屢禮於人 淮陰侯傳乃
爲兒女子所誑 外戚衆爲人所累賣 五宗衆詣中尉府簿 酷吏
傳跪伏便買臣等前 魯鄒傳故女無美惡入宮見妬士無賢不肖入
朝見妬 被動ハ其格也

現在被動

被動といふハ活ともいふハちりり活きハ小説
語ニ其格走下と云はれ此より現在より去未未あり
所責類 古冬ハおぼそけ格也
陽貨年四十而見惡焉其終也巳 公治長屢禮於人 淮陰侯傳乃
爲兒女子所誑 外戚衆爲人所累賣 五宗衆詣中尉府簿 酷吏
傳跪伏便買臣等前 魯鄒傳故女無美惡入宮見妬士無賢不肖入
朝見妬 被動ハ其格也

全過被動

被動といふハ活ともいふハちりり活きハ小説
語ニ其格走下と云はれ此より現在より去未未あり
所責類 古冬ハおぼそけ格也
陽貨年四十而見惡焉其終也巳 公治長屢禮於人 淮陰侯傳乃
爲兒女子所誑 外戚衆爲人所累賣 五宗衆詣中尉府簿 酷吏
傳跪伏便買臣等前 魯鄒傳故女無美惡入宮見妬士無賢不肖入
朝見妬 被動ハ其格也

未だ被動

楚象且王敗於張儀 又袁龜傳調爲隴西都尉 呂后紀徵至長
安多被動の格あり
見恨類 古俳諧あらはれ人よりみられ
田儻傳螻蟻等則斬手釐足則斬足
將被忘類 古雜あらはれ心むすべとぞるゆきゆくへもあらぬ
しそハすべて又みせりて所格也
とをあらべしとへハ人みせられんといふんが如し
淮陰侯傳上怒曰烹之通曰嗟乎宦哉意也ニラレントとよみあり

自動活用言

自動といふハ中活ともいふハ能所をさされしるるなり此活
辭といふなりこれより現在より去未未あり
成類 古哀れなりなる候を袖ふりハ其格也
越前門居甚貧 項羽紀雖吳中子弟皆已憚籍 淮陰侯傳居常
鞅蓋與絳灌等列 楚象以說衆乃喜

現在自動

現在自動ハ中活ともいふハ能所をさされしるるなり此活
辭といふなりこれより現在より去未未あり
成類 古哀れなりなる候を袖ふりハ其格也
越前門居甚貧 項羽紀雖吳中子弟皆已憚籍 淮陰侯傳居常
鞅蓋與絳灌等列 楚象以說衆乃喜

全自動

居類 古俳諧人小なりむつきたよハ思ひきてむきとや
火おむやけをP 同序きのハありえかこうて時をう
上巻活用云
〇十五

あひよて... 五帝紀書缺有間矣 陳陟系尉劍筵
全自動ハ... 及受獲等の付せてぬめえ
元の韻の活辞也

未過自動

行類 拾遺... 鄭系他日指動必食異物
未過自動ハ... 格ハ... 格ハ...

五... 十九... 十八...
か... 五... 十八...

記上... 以上... 以上...
記上... 以上... 以上...

如著類 古序... 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

未來自動

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

如著類 雍也天厭之天厭之

有情活用云

すべて三動云... 辭ハ動他 被動 自動...

留有情

忘類 左... 大宛傳鳥... 狼... 乳...

非情活用云

物... 辭... 古... 今... 春... 秋... 冬... 夏...
動他... 格...

動他... 格...

動他... 格...

動他... 格...

動他... 格...

動他... 格...

動他... 格...

文例と似て近世の誹諧の句をも附出せるに却て雅俗又涉
ることとをさとさんとしてるをあやしませ

直説

鳴類 古序やきまうこハ人の心をあまらしてよろのこを
とぞまじりたる。一語ひていへば響くのたえ下准之

學而學而時習之不亦説乎
是る候をときとにあらんまみま

附説

鳴則類 世中にあらん人ありきまきなりのみまむひのこ
とを不修りなきく物よはまていひりせざるなり

學而有朋自遠方来不亦樂乎友が訪と来ル有レバのさ
とちまきまぬれとまればかほるなり

才二附説

雖鳴類 ほとひときうつりことさりとていひり
附説は雖字のまあれバ才二ハ則字のま

學而人不知而不愠不亦君子乎人知ラサレ用又人ハ不知用のさ
かうくと「の」やまきくやゆきのうやおういこハ

許可

鳴類 ときとて候もいであのりやよりぞまきりてま
のちまきくはかくれづとくあらべし

八佾夏礼吾能言夏杞不足徵也吾ヨク言フべし
ゆきをや鬼もうひは流ひとぞ

許可附説 八佾文獻不足故也是ラサレハ十りのま
許可才二附説同 是則吾能徴之矣則字才二附説はあり

使令

鳴類 いまへ乃車御るまきれしゆりあをまかろ
今も是そなり。ほの世まはさるれとぞ

陽貨居吾語女
ゆきののそらゆひけけまきり

不定

將鳴類 ときとて候もいであのりやよりぞまきりてま
のちまきくはかくれづとくあらべし

八佾爲力不同科カノ科ヲ同ウセザランガ爲ナリのま
うのまの候もいであのりやよりぞまきりてま

疑問

鳴輿類 其れあり吉登山乃はらうハ人まはがこころまハ
とのまの候もいであのりやよりぞまきりてま

學而末之與柳輿之與
間まの候もいであのりやよりぞまきりてま

不無

鳴也類 ときとて候もいであのりやよりぞまきりてま
のちまきくはかくれづとくあらべし

泰伯魏之唯天爲大唯堯則之有字を用あり者ハもやより
いろくの候もいであのりやよりぞまきりてま

不有

不鳴類 今ハ山もまきり
のちまきくはかくれづとくあらべし

子罕鳳鳥不至河不出圖吾已矣夫
あそよとまきり

上卷活用云

使令餘論

使令法を云ふ下知の詞との。こはけし七柳へめしと云々
まづハ呼格上の辭を添へりし。まづハこそ列んぞと云々

計使令

吹類 古妻たる風ハ色のおろりをよきてけけらぶつと云うつろ
りて見せ。

世使令

立類 古妻たるぬともをよきてのこを梅れき。一は時の思ひ出
りて見せ。

互使令

白類 古冬てみれをハゆきふや。一はてんぞと云々をだる。母
へ人の志るべく。同義。一はてへハといへり約え。

閉使令

免使令 古妻たるをハうすみよ。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

延使令

然類 古誹諧。一は此のめらぬ。一はめらぬ。一はめらぬ。一はめらぬ。
定類 古妻たるをハうすみよ。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

礼使令

折類 古妻たるをハうすみよ。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

呼格使令

定類 古妻たるをハうすみよ。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

恨類

古妻たるをハうすみよ。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

古曾使令

見古曾類 万四又五。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

奈武使令

言奈武類 古妻たるをハうすみよ。一はてんぞと云々をだる。ぬきめ
りりれ山う勢。

疑問餘論

疑問法ハ疑辭のそりあぐん。これりて才ニ能格と同じ。但彼ハ
後ひあり。こそハ法び子を果てし。

還上状態

奈我良類 古秋ぬかてさうふやとらんめみぢぞのありうら

物加良類 古友やうき及びがぬく里にあまのきをばあうと

物由惠類 古社あはれあつてあめことめさき女あまの川あは

万尔万尔類 古離別日くれをは山のさうらにあうせんとめむ

顔淵忠告而善道之 子張博學而篤志切問而近思 述而竊比於

我光彭 先進益再舍瑟而作 鳴貨筦而笑 泰伯洋々乎盈有

哉 淮陰侯傳上巨怒曰喜 同上堂從容與信言諸將能不 范滂

傳唐舉執視而笑曰 留侯參戚夫人壺流涕

形容云ハ多とひ多くれ語をへててもうあふ下の用云連う

りる格子段が故漢語みてハ多く直又用云と熟る也

朝々時令

朝々呼於古祖楷志での因長を懸あくよぶ 同意うさあくよぶ

無間時令

無間散類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

時令形容言

こハ時令よあづりよよたに あさくやうやくもをぐうのやハ

履波時令

今則絶類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履毛時令

一日無類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔時令

今更拂類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履上時令

不絶仕類 古大秋みのつ必実れふち川陸あて工君まつりへひま

還上時令

万傳於拾遺 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

處在形容云

此方經於 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於此方經於 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於此方經於 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於此方經於 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於他处在類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於他处在類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於他处在類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於他处在類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於他处在類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

履尔处在

於他处在類 古志あはれくちうともぬいあさうじ 同意中あくよぶ

上卷形步

〇二二

左同等

るとのひらりたりたりとゆふ。若くはひらりと流るる。バ。おのれ。美より好ハ。あつと。と。か。り。へ。だ。又。万。又。阿。阿。つ。ち。の。と。り。に。之。う。く。い。ひ。つ。ぎ。ど。あ。る。も。古。意。結。ぎ。り。の。と。り。に。さ。ち。い。で。と。あ。り。に。同。じ。ま。後。撰。つ。く。と。き。此。等。より。後。の。み。を。此。川。云。この。み。を。此。川。の。下。に。ハ。同。等。形。容。云。れ。の。を。と。ぶ。ま。る。み。を。此。川。の。め。く。ま。れ。さ。し。の。ハ。め。と。獨。立。代。名。云。を。此。が。ゆ。え。に。同。等。形。容。も。あ。る。も。左。許。曾。見。類。拾。遺。人。を。此。ハ。さ。こ。そ。名。ら。う。め。金。葉。さ。し。を。ハ。カ。左。モ。許。曾。有。類。古。意。う。つ。め。さ。も。う。そ。何。ら。め。拾。遺。さ。も。こ。そ。左。叙。奈。登。思。類。千。載。あ。き。み。を。さ。ぞ。さ。び。う。此。契。を。ぞ。と。か。り。ハ。先。進。回。也。視。予。猶。父。也。予。不。得。視。猶。子。倉。公。傳。已。熱。如。火。俗。語。ト。元。ウ。ド。の。め。も。この。猶。字。如。字。等。の。さ。し。孔。子。魯。東。門。有。人。其。類。似。竟。其。項。類。皇。陶。其。肩。類。子。產。然。自。要。以。下。不。及。禹。三。寸。壘。若。喪。家。之。狗。陳。勝。等。也。國。可。乎。始。皇。紀。而。天。下。響。應。

履尔併合

並來類 古秋我門は船なるをもの形くまべよ。はさわく。風。は。唇。ハ。併合形容言。こ。ハ。と。も。に。ま。べ。よ。ま。え。に。り。う。と。も。に。ま。べ。て。ま。ご。ん。

履豆併合

並登類 古意秋風のあきと使ぬるひびきし。神ハ。ま。べ。て。こ。さ。條。の。毛。述。而。互。難。與。言。憲。問。見。其。與。先。生。並。行。也。始。皇。紀。山。東。豪。俊。遂。竝。起。而。亡。秦。旗。共。孟。嘗。君。傳。相。與。語。淮。南。傳。神。康。治。王。

殊除去

殊寒類 古秋あれたの類は。さ。そ。あ。と。に。ま。ご。ん。同。意。は。ま。ご。ん。分。立。寄。類 古秋日び人の。日。死。て。ま。ご。ん。この。ハ。お。ひ。う。ぎ。形。く。お。郷。黨。使。々。言。准。謹。再。越。孫。至。其。母。及。邑。人。盡。哀。之。唯。朱。公。獨。笑。曰。云。

還上選取

奈良祿波類 新後檢なぎり。よ。久。米。此。い。と。標。と。そ。も。よ。を。後。う。そ。う。の。さ。さ。り。お。ま。古。秋。天。の。川。後。激。志。は。信。多。う。う。つ。お。い。お。て。祿。を。あ。き。を。さ。さ。る。こ。ハ。祿。を。の。下。は。思。ハ。又。二。と。い。ひ。辭。を。活。て。ま。ご。ん。ま。ご。ん。や。が。て。万。ハ。ハ。ま。ま。ま。い。お。い。お。い。祿。を。思。ハ。ぬ。ま。ま。ま。此。里。よ。う。然。の。思。見。つ。と。よ。り。さ。れ。バ。い。と。う。う。う。是。云。

上等形容云

分除去

選取形容云

還上選取

奈良祿波類

上等形容云

魯鄒傳吾與富貴而誦於人 靈資賤而輕世肆志焉 酷吏傳靈見乳 虎無值寧成之怒

禁止形容云

こハをやきそ たるをい何をゆり けり 漢字ハ母勿莫等あふり

戴余禁止

莫鳴類 古秋きもく 吹いさく びききそ 同妻うまが 登ハハハハ

り己が 神ゆん 本房よりい てる月 にかきあひき 同十七

いぬれそ 毛ハ列を ぎて下を ぞもとい けり 毛ハハを ぞを 得り

とすめり 夫木角 何れバとて 身バハたの 毛そこハ けり

履禁禁止

勿語類 古秋 じんかちみきと 人より けり 同今さるに けり

親也 母以十モノノのさ 顔淵非礼勿視 非礼勿聽 高祖紀 非

料度形容云

こハ天ういさど のとどひあて けり けり けり

大氏料度

大方 歸類 古離 別人や けり けり けり けり

里仁蓋有之矣 季氏吾恐季孫之憂不在 顯史而在 蕭牆之内也 淮陰侯傳 顧王策安所決耳

疑問形容云

こハ疑問代名云の 何 謝等の 辞 けり けり けり けり

歟疑問

涼 歟 登立 寄類 六帖 けり けり けり けり

何疑問

奈 尔 曝 類 古 難 けり けり けり けり

子小 せん 同 古 序 子 けり けり けり けり

新 續 古 けり けり けり けり

て けり けり けり けり

て けり けり けり けり

と けり けり けり けり

ぬ の き 古 離 別 けり けり けり けり

セ 揚 語 志 けり けり けり けり

七 俗にハ種はよのひくをさう。 狹在あどあるなる思ひをやま
 を。 古意あどくくをさうしせん。 駿河秋安世如の同じ。 後
 松あどてかく雪うくをさうしせん。 同あどてうは百をさうしせん。 名付松
 りん。 風雅たがゆくへともあどやふきこぬ。 古意あど外うく
 後の何よう記してゆけん。 新後あど海魚美のうりがさ。
 續古あどやうくあどわくをさうしせん。 古意あどおき思ひやみそと
 万四こぐらめりもよきこざらめ。 新古あどそのあどいり
 あらひ。 古意あどこれ山のうりによちえび。 万八いりよつぎまや
 夫木波をもいりいりにせん。 拾遺いりあやいりあめんと
 翁。 古意いりむりり人のあかの地踏しうらめり。 万二をいりせ
 ぬに思ひをさう。 拾遺いりてあやを入るあらせん。 同いりて
 いうでああをいり。 古秋山をいりてりみぢあそめをさう。 拾遺
 いうてりとあめあひのあるとせん。 夫木いりてまを思ひをさう。
 古あ名のいりいりさ記ちるあそをさうしせん。 新古いりいりあそをさう。
 のあつくと。 古秋いりいり秋の長くてあせん。 後撰あよさと
 に君いりいりいりあちとさ。 あと新古いりあよとてあせん。
 うんこいり時今あつり。 疑問形容云いりいりいりあど
 同じ。 あと古意あをいりちやらば目をさうしせん。 あれ在ああつり
 あ疑問形容云いりいりいりいり。 あと新古いりあをいりあつり
 空はああへりてきぬ。 あいりああつり。 疑問形容云いり。

誰疑問

誰見類

万五みりしやしりしりしをぬれん其の意ハあを
 誤るるのあをさうしせん。 先達既いりり。 千載をさうし
 をさうしハたさかり。 後撰都ハたさをう君いり思ひいり
 大和地信だのみみぬたれとありてああらん。 古春たさ
 ういりあつりみもてたさ。 記下とさそあまへまをさうし
 書紀いりてあつりここのあつりあまへまをさうし。 催馬あつり
 ば中人とてあつりとあつりあつり。 古雜あをさうしあまへ
 色紫あつりいりあつりあつり。 同意あをさうしあまへ
 ん。 同春あつりあつりあつり。 同意あをさうしあまへ
 とあつり。 六帖たれいり思ひあつり。 あつり。 古秋たがぬ
 うさつりあつりあつり。

比較形容云

こハあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
 そくあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
 八伯あつりあつりあつりあつり。 為政人焉慶哉。 顔淵蓋徹乎蓋ハ何不
 子路又何如焉。 張儀傳何敢言伐章凍能乎。 魏都何待克哉。
 刺客傳子將何欲。 淮陰侯傳何為斬壯士。 蒙恬傳何乃罪地脈哉。
 鄭家此與晉之里克何異。 魏都惡得與魏成子比也。 張儀傳吾寧
 不能言而富貴乎。 蘇布傳何其拔興之暴也。 始皇紀豈世之賢哉。

自先比較

自先類。 古秋あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
 とあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
 同意あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
 上卷形容云。

同形 先行其言而後從之

通用形容言毛類

先其言而後從之 万九百九十九

美類 古語とひがごとく 後撰又万十

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

とちりぬをえ 又袖の口をぬき

後撰又万十 又山字に風

同形 先行其言而後從之

万九百九十九

美類 古語とひがごとく

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

同形 先行其言而後從之

万九百九十九

美類 古語とひがごとく

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

とちりぬをえ

又袖の口をぬき

後撰又万十

又山字に風

上卷形容云

須良類 曾丹集とけてすくぬり初どもなまきありぬをぬざめがち

乃美類 古恋人志をぬぬひのそこそびひいぬれ 中と秋款きを

余利類 古恋いさしんといひて口くれーあーよりぬひひさ

万傳類 古雜みやこまで初まきかよへかろことハ 同突いそ

加良類 古雜我がうらうき世中とまきまつく 同秋あくらうら

古恋 変女兼ふ谷のうこまに初めうらにその花いやーかへ

由惠類 古恋人めゆ恋のちにあひひのちのけくハ 中とゆきて

那武類 古物名よりとよりとされておびつとよめやこれあひそ

基盤類 古恋者あまき木とに花ぞさたまらる 同恋風あくあ

毛豆類 古序うちす紫のまじりぬいすぬゆりて 拾遺あもてち

志豆類 古雜ハまむぐらして門させりてハ 伊勢あねぬり

加保類 後撰中ありがほにこひしきやなぞ 金塚あうら

奈賀良類 古秋をいそむ人ハ 枝さぐらみよ 續後撰つらきさ

賀豆類 古雜なごり我身のいでかてにる 同妻すきがてより

賀豆良類 古恋ぬまうへかてとらこそハ さま 後撰ぬ人の

波加利類 古恋志ぬめ命いさめやまるところこま 野のをバウ

万類 後撰時よりば序うやうとそ秋サそま かきぬのまにに

都々類 古秋地とに秋ぞあし記みちつくうらるひゆを眼

ちのちやものうけをこひ何にこい上へうらる 同春ちや
がもみたてもやい何こみちへぬ 吉野あまうら ちふりつこ
ハ下は春見エ又者ラとりの 詞をふくあり 餘情つとらふハ
是心こせき子形容のさしん

上巻形容云

○接續云才七 接續云ハ切せざる辞の下にかきて上下を連ねつゝく
る辞をされバ接續云又ハバ定する格も格をぬ

かへて下につづくことありこれ接續云の格也。是又合連分裂合
説違原因設令罷取除去逮及取保説明の十二等あり

合連接續云 ハカスツケコトバ 此ハ上下をハセつゝぬる也 ハカスツケコトバ 此ハ上下をハセつゝぬる也 ハカスツケコトバ 此ハ上下をハセつゝぬる也

登合連 古秋むぐらしの信つらなべ又日バくきぬ ト 此ハ山此弦
後撰にもハフそをそも ト 古秋人の是らハ定する格も
切せざる語をつぐ ト 古秋のよれをハカス ト 此ハ山此弦

ハトイへの約あり ト 古秋本と此このそのちり ト 此ハ山此弦
又 同秋の記風の吹と吹ぬるむぎ ト 此ハ山此弦

のり ト 此ハ山此弦
同志の ト 此ハ山此弦

る 新紫野 ト 此ハ山此弦

り ト 此ハ山此弦

て ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

と ト 此ハ山此弦

將分裂

波多類 後撰秘風のみをばさすかにひびくことよのあきありと

或分裂

阿留波類 古序あるをいふをかくるこれ其はゆる香と流と

抑分裂

曾毛曾毛類 古序をかくるはれさぬひりかをわかつのうとふもかく

述而若聖與仁則吾豈敢抑爲之不厭誨人不倦則可謂云再已矣
孟嘗君傳馮先生甚貧猶有一劍耳又刪錄 左傳昭八羽臣又聞之

舍說梓續云

こハ上を替て下ハ説く難と云ふもいふはあざむきてはとみ又は心
と濁りありこハ情ひりてめて未然のとあり

登毛舍說

登毛類 古雜位吉とありハつぐと毛ぬがぬふ人わききまふあふ
と云ふ 新古人をわいのちの山ありとばとハとされさこ

縦舍說

多登比類 古序人よりあかたりぬとせどふれぬとみかれりりぬ
るといふ時うつててとさるゝのびりぬふりりりり

還上舍說

登毛類 古秋義が是ちりるん少堂のあまはぬきてをゆるんさよ
はふくと云ふ

子罕拜下礼也今拜乎上然也雖違衆吾從下 項羽紀縦江東父兄
憐而王我々何面目見之縦彼不言籍獨不愧於心乎 籍使也同じ

違度接續云 このハ上よさういひりる 定と云ふをいふ 辞まで濁りて心 既然
のやも

土違度

礼土類 古序註びさハ陽れとち処をんぬきけきとてそ
えと同じさうあれバゆしきぬをうへとぬるも
美多ぬれバよりひりぬるぬとりハのせどもをいふれバ物思ひ
も多し 玉葉ちぎでう君こそハさありぬとこハさま
る格めて切れぬと語をつくる格同 格と云ふ格に
れどさらさるこハをぬれ又格と云ふ格

免土類 古表も免も同じむりにならぬとて手ぬる人をり
さるやと云ふこハをぬる格

志加土類 古雜つひゆくことハかきてきくありとこの志ハ
こそこの結びの志と一つあり

計土類 万十五さる大ぬハゆきよと 五又十七をよとこ
ハとれどのれをさふきよと云ふ

礼土毛類 古序はさゆつちのりくるきとておとせる時よりいで
きたなり 志ハ何とせどもせよはさりのりハ云 同雜

詞かきやうふのさよりゆきなり けりなれどもはけさるき
さも見いで

土毛違度

礼土毛類 古序はさゆつちのりくるきとておとせる時よりいで
きたなり 志ハ何とせどもせよはさりのりハ云 同雜

詞かきやうふのさよりゆきなり けりなれどもはけさるき
さも見いで

志加土毛類 古雜つひゆくことハかきてきくありとこの志ハ
こそこの結びの志と一つあり

計土毛類 万十五さる大ぬハゆきよと 五又十七をよとこ
ハとれどのれをさふきよと云ふ

礼土毛類 古序はさゆつちのりくるきとておとせる時よりいで
きたなり 志ハ何とせどもせよはさりのりハ云 同雜

上巻接續云

〇三十一

還上議定

祿婆類 古秋天の川後流あつて流あどりつてわたりて祿婆思ハ
又三のそあまたる祿婆の下に辞を流てまくり既又尼ゆ
奈婆類 古我のそや世流管と唱ひん人のかのあもり
後撰の出てとの云流管を流てすの白雲と成を流うに

礼婆類

古志殊く流そめてたき極管まで空中までうりれ
同 志殊く流そめてたき極管まで空中までうりれ

八伯然則管仲知礼乎 魯鄒傳臣問云者何則無因而至前也 李
斯傳何也則能罰之加焉必也 越事由是觀之何處不為福乎

設令接續云

此ハ日を設きて説くハの於て漢字ハ若還謝或儻とよあ

若有設令

若留礼良婆類 古序このうに此ハ何をやぎの系もえむ松の流
此ちりう世流してまさ流のうづとくつとハハ

ものあどくどとせられらば此ハ若不流長久ニ留マル有ハ
のさこ本ハの下のあをやとりハ四ハハ衍文を王

千一有婆類 古雜流くくさよと人あつたハ流ハの備にりやた
まつてらぶとさよよ

雍也善為我辭焉如道復我者則吾必在汶上矣 滑柱傳若親有嚴
客 張馮傳今盜宗廟器而族之有如萬分之一假令愚民取長陵一
杯土陛下何以加其法乎 伯夷傳儻所謂天道是耶非耶

選取接續云

此ハえらびとるハのうりハとく

自波選取

由波類 万ハむきりの合にむりひあんゆハ君が流流のかちつう
ふまが

與利波類 古秋のうりものむむむ 下ハハ女即むむがむむむ
わうとてんを

受波類 万ニかくばうりあひつらる 下ハハ山のいをさあ
むてあまうあをばむむ ンヨリハのさこ

還上選取

與利波類 後撰まぢかくて流らきをみらハうんむどもうたハ將
ハハ流ら下り

微子且而與其從辟人之士也 豈若從辟世之士哉

除去接續云

此ハとりのぞるまのよりはうに下りあハよりあよりてあ

自外除去

與利外類 古秋のうりものなく山里ハ夕暮を風下まほうにと
ふんがけし 同為名ありや下りてをてむをつ

よめやこハヨリ外ニ離レテのさこ 同為名ありや下りてをてむをつ
きさここれも松ヨリ外ニハ又のさこ

自後除去

與利後波類 古雜流そ免一時下りあハうちて入て世ハ身流まや
あつてさる

上巻接續云

八佾自既灌而往者 鄭陸傳自天地剖判未始有也 平準書興
利之臣自此始也 范蔡傳先生之壽從今以往者四十三歲
此ハ下文おかよびておてさてうてあぶる漢字の初めあ
まり訓蒙題式に血脉貫通非此字不可とあり也逮及のま
互類 古雜漢書此のまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

互逮及 古雜漢書此のまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

爾互類 後撰書此のまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

ひるよるわりのまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

左互類 後拾いのでせんあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

加久互類 古序かくてぞをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

還上逮及 互類 古序かくてぞをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

學而字而時習之 高祖紀始大人常以云今云 五宗及憲王病
甚及主費云 雍也文質彬々 然後君子

敢保接續云 此ハ上文の義を説明をいふてまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

請取保 古雜漢書此のまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

顔淵請事斯語矣 韓承事急願公雖病為一宿之行

說明接續云 此ハ上文の義を説明をいふてまのあぶるをいふて山をいふてま
をいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

登波說明 古序登波とてりお免とハあ免日くりみこれめなり

須奈波知類 古序そのやうおちうきとてりその名きこえとてり人
をいふてまのあぶるをいふて山をいふてまをいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

多登開波類 古序まのあぶるをいふて山をいふてまをいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

伊波波 古序ぬんぬんやをいふて山をいふてまをいふて子なるまのあぶるをいふて古起也

まがれらる。万葉從此鳴度古今素下伺山川より茶の流せけるを
よ多る源氏次磨たきより舟登りのうさひのくしりてこぎゆく
など云々さらのより例今学の傍るくバミをとりめべし漢籍よ
みみみよよひ於字と或ハをみもあてよ巴もあてよよひもけ
さへを智れ子細あるがまよこの指示の品をとらるる

所生指示云
こハの如クの如クのうへがあさどりの辞古地名妻がく
まう一通の如くをバこハ春霞の中みとのかき

乃所生
之上類 古意う記を此うへを志 之上類 古意んぬがうへま
もるりくき

公治長縲絏之中 李氏蕭牆之内 滑誓傳賜酒大王之前 魯鄒
傳上書而於年勝公孫詭之間 李斯傳更舍廁中鼠

所與指示云
こハ志らぬまて神の中ゆや道さうに工風のうへま登まうと
へとよあどのまに中よま

於年内類 古春季のうちに妻ハ米にヒ一とセ河こそとやいと
公治長吏釋浮字海 八佞八佞舞於庭 日者傳居三日宋忠見賈
誼於殿門外 平准書吾有羊上林中

所役指示云
こハちのまをかきててむをハはのうへをまどのまをうちを
うへと

乎所役
乎彼家恩類 古哀傷詞これあのみより派まかりるる
微子喪致乎哀而止 儒林傳董仲舒不觀於舍園

所奪指示言
こハ世より法より霞のるよりかくまぬのまよりと取りれあ
のうごよりあどのるよりあごよりのとらひこ

余利所奪
自挿梅至見雪類 古序梅をかざりよりとらめて雪をるるに
雍也自牖執其手曰 項羽紀從此道至吾軍不過二十里耳 袁龜
傳丞相從車上謝袁盎 晉家從樽上觀而笑之 張儀傳起發汝山

浮江以下 封禪書天子自惟中望見焉
所格と指示云とのんぢめを漢語あてのて論語子入大廟の如
きハ所與格なり鼓方叔入於河の如きハ所與指示云なり

又史記日者傳見賈誼於殿門外とあるを殿門外ニ於テ賈
誼ヲ見ルヤのまよ書く時ハ於字をこまきて殿門外見賈誼と
やう小書く例もさうとハ省字指示云の格とまべし

まよ在字非字の如き諸字此上頭小あるとはハるる所與格
又從ふて在をハニアリ非をハニアラズやよむ例こハ在字非
字の干をさうを格さハ書品刑の庶民固有令政在天下と
まをてささるる但書在治忽あどの在ハ察スルさめて吳

上卷指示云

〇三十七

與辱罵

於禮與加也都與於禮與加也都與松野をのりてまめくうの勢ぞゆる死松野をのりてまめくうの勢ぞゆる死

也辱罵

阿奈は也類阿奈は也類金塚あふらうぐらの君ガ公金塚あふらうぐらの君ガ公六帖あをわつらハ六帖あをわつらハ

侮慢感動

こハ人をあざむく勢シ。右妻あうまき秘をもほろけりこハ人をあざむく勢シ。右妻あうまき秘をもほろけり

也侮慢

阿云也類阿云也類記中阿音引志夜胡志夜此者嘲笑者也。古誅諧記中阿音引志夜胡志夜此者嘲笑者也。古誅諧

發大感動

笑勢哭勢ハ大感動也。小説阿笑加うく笑々嘻々笑勢哭勢ハ大感動也。小説阿笑加うく笑々嘻々

波發笑

波登笑類波登笑類榮茶と名也。又松うちわらひわくバみふ所をく榮茶と名也。又松うちわらひわくバみふ所をく

召呼

召呼召呼又やよふ通ふ又やよふ通ふいをいを俗語ヨイヤイ俗語ヨイヤイ式社詞式社詞

也召呼

戴也類戴也類駿河秋也宇止者末尔駿河秋也宇止者末尔

也召呼

履也類履也類大系やを大系やを伏見の山伏見の山

同ゆる志てや同ゆる志てや古序難はつふさくや古序難はつふさくや同意何とく同意何とく

ぎ次ぎ次やき丹の 後拾い々ぎ次やき丹の 後拾い々おもんおもんのさあやあくの美のりのさあやあくの美のり

同十六だんを同十六だんを

同雅を同雅を

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

同十九ゆめ同十九ゆめ

與召呼

履也類履也類拾遺拾遺のろがのろがをぬよをぬよいくよいくよへぬへぬんん同牙をつて同牙をつてとよとよ

毛也類毛也類万万一一くくととままよよ同ふぐ同ふぐりりよよ五五のちのちををののかかららハハ

記上あ記上あととめめよよ既宗紀既宗紀ぬぬててゆゆくくめめよよああどど

上巻感動上巻感動

〇四十

奈招呼

東次者礼奈天半止、乃部吕奈字太止、乃部死奈 万一、
つ、あかみ 同四、亦ハこひんを 拾遺卷にらる上

惠招呼

書紀云、
一、君一、何、
十一、公ハ、
十四、亦ハ、

伊招呼

書紀云、
万三、志、
四、死、

乎招呼

記上、阿那迹夜志、
又、夜幣、
三、春、

與、哭泣

六帖、君、
十一、を、
又、十、
又、十、

哭泣感重

刺客傳、乃於邑曰、
哭、
咽、

禁止感重

八人を制、
則、
阿、
古、

莫置禁止

阿、
古、

忿怒感動

日、
孟、

意礼忿怒

伊、
字、

奮厲感動

不、
俗、

伊邪勸厲

記、
古、

阿也恐怖

阿、
俗、

り置あり。使令疑問の二法ハ上巻活用云の條小見たり。カをばとつめことハ過去格のてと所格のをとこの能格のむとをとりあはせていへるゆゑに六格三格の總名と云え

波受件云格

記上伊毛波和須礼士よ

白波類

風俗かひか祢に之呂支

此波類 記上さむぎも許礼ハ

晴波類

後撰あきふり此

すべて能格の件云を受るまいたるこ此類ニ妹叙白叙此叙晴叙

省波格

藤浪類 古友我宿の池此ふちみ四咲又此山郭公四いつうき

重波格

里波人波類 古秋ぎやハあきてくハふりあややまよこの二

波結辞格

久類 古妻なくする丁急ハ

受類 古志づつふひとめう

慈類

詞詠あ記やまれ志とづハ

都類 古志ハいきてつををど

畢奴類

古妻ちりうふ花よるハ

布類 金葉あきり此さやハひハ
武類 いせぬ澄いなりかほき志
叶類 古離別看此まにく河とハうづねん 新古志ハよくとも霞
由類 拾遺かききの柳を急ハハ 類 後撰まづ三芳登のやまハ
利類 古此借人又あそん月此まき夜ハ思ひかきてむまう里史
幾類 後撰白ひあめ又ハ 現志類 後撰秋寄此ちりハ
万志類 古春むら此ハのどき 良志類 六帖此のりみぢまいま
加奈類 古難かろくも志ハ巻又 都々類 古妻今一の山や若ハ
後拾よもたぐあてハやま割谷の里こハやまどとりあをいひハ
まをのひくきさるん 新古物うきことハか不ちのさとこハか不とい
又ある書ハ志のまがゆにいづれたケり うつ不むる君一
かよそにるハま又志をを格とまはハひハこもハの
うアをとと格

還上波格

我身波類

古離別よきもの之為やらん山ゆきるるべ

波属合助辞

後撰のみそく紙とそ

登波類

古哀傷山のすす紙の

平波類 古離別わくれをハ山の

互波類

古哀傷をでよるをあ

ハをいりてみそく紙のめくうるハは法てよむべし。さてすて合助辞はかく接續云にふる格。

重合助辞格

花平波君平波類

古離別秋萩の花をを西にぬくせどもきみをハ

合助辞省波

尔類

後撰我社と秋の紙と

登類

後撰我社と秋の紙と

省結辞波格

梅花笠類

古離ぬみてみ笠ハ梅のををすてかく

ハを省らるハ記下ゆゆいへひつてつまがいのあきり甲

能主相重格

波與叙重

波與古曾重

古美重とのえ丁世

すべてオ一能格ハ軽くオニオ三能格ハ重しされハ軽重お重を

能主失格

波誤作叙

菅方秋の萩とわくしむぬといひたるそ地あふ人の

波結辞失格

受誤作叙

風雅をわざりに人ハ名うんむづさにはあふのたぐ

慈誤作受

拾遺まがくれかまきりあハぬもくとむむびりあハ

都誤作文

新古かきつらるるをゆるれど足ても忍びん

愚誤作志

風雅志をむしりきうみハうつりそつらん

毛受伸玄格

記下山がこままら阿表那母まびくとる辞

省毛格

岩乃加計道類

古離よにぬればうさうそまされみちりぬ岩の

重毛格

去年毛今年毛類

六帖をといもこそあまもをといひも作

毛結辞格

久類

古秋山の本れ葉のりあ

慈類

新後拾まごきうぬうらみ

下巻能主格

〇三

畢奴類 古雜にんて 久く

布類 續子よひりも雲の月

咄類 古秋意くハ見て 志の

由類 金紫くもれば月の影と

後撰 後撰タぐれハ松もか

利類 古英とくまされるる人毛

過幾類 拾遺たまうらのを記る

現志類 古冬ふやどい雲あうし

万志類 古英意にハあつたこ

良志類 新古にがあうみもこ不

加奈類 古英うくひもだすも

都々類 古英南もみぎもあう

金紫志のふれどうひもさぎ

河ま小松こハあつたのひ

とりの説よれど小座くう

從事中あかり

還上毛格

住憂加利志毛類 拾遺のまばとくゆきてめくつんあふことのを

毛属合助辞波毛類

万十九あをわくもいふつ強さあ 君を

尔毛類 上りも下りもあ

登毛類 後撰のつこと毛妻の先

乎毛類 下りもあ

弓毛類 上りもあ

重合助辞格 現尔毛夢尔毛類 新古

色乎毛香乎毛類 古春

合助辞省毛登類 後拾い川とくべーと国をぬ君う

省結辞毛格 三芳野山類 新古花をうてたは某此戸をさうてあやのわかく

能主相重格 毛與叙重 古春人のおそ風川ふ 毛與古曾重 古英くとあめを木

毛結辞失格 受誤作奴 新古のりまぐ格とへど国こそへぬ風雅も同じ誤

現志誤作現幾 玉紫いりあせんあめりやくうと山標あうと

者字法 爲政三家著以雅徹 同今之孝者是謂能養

也字法 雍也雍也 可使南面 先進柴也 愚參也 曾合類助語辞

傳類拾遺すの事也新古かみひもよて

左閉於源をくめさへつるもの事さへ古燕やとる月さへて

ふる新古殊も松さへ新古かみひもよて

を添てすくさのう新古かみひもよて

くつこといふささハありて新古かみひもよて

とやうにひつりそハ白けささ新古かみひもよて

調といさむ新古かみひもよて

乃美類新古かみひもよて

婆加利類新古かみひもよて

省合助辞格新古かみひもよて

省結辞叙格新古かみひもよて

叙結轉格現幾轉為現新古かみひもよて

能主失格

叙不調類六帖春ハの事也新古かみひもよて

底も秋ハやど新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

とぞ新古かみひもよて

下巻能主格

〇七

叫類 古語 地佐山 山と云ふれをどぐりてわくれ流のゆきのまゆ

類 古語 山のふりまのまきバ 千載を笑しうりて志

現幾類 古語 いふぞ此そよとの 現幾類 後撰 ちりぬる花の志

良志類 建保 四多合 とうり此人 計利類 新古 あつてまのつきのか

奈利類 千載 志ごもり 實まか 加奈類 新古 ねらうたの 日すら

中々古語 あまごもれをあるまひとの たりゆく かのりまの

左也計左類 古秋 めめハル びてまの ざやま 後撰 よの みお

る格 万三 ぶ子の 里し せん 年の 志り かく 十い まごま

ハ形容 云まき 伴云 みて びを づる 格とハい せり 吳ん

人心乃類 古語 吹まよ 吹風を 雲み 秋まごの けつり ちゆく ちん

還上乃格

乃結轉交格

能主相重格

乃属賀格

賀結辞格

どくろよめり これら 疑問法 ちうと古き 志を ぞよめり

人の志 万三 ぶ子の 里し せん 年の 志り かく 十い まごま

乃結轉交格 奈良婆類 古語 志の 志り かく 十い まごま

能主相重格 乃與許曾重 後撰 律の 志り かく 十い まごま

乃属賀格 君賀類 古語 志の 志り かく 十い まごま

賀結辞格 奴留類 古語 志の 志り かく 十い まごま

和昆志左類 古語 志の 志り かく 十い まごま

中々古語 あまごもれをあるまひとの たりゆく かのりまの

ひちら 侍の ちうとちて 志の 志り かく 十い まごま

志の 志り かく 十い まごま

下巻能主格

奈武合助辞 叙奈武終 土左日記のわさりのハとぢぞまんまらるるをハとぢ

奈武余類 ありあけのハとぢありあけのハとぢありあけのハとぢ

をぞのされぬハとぢハとぢハとぢハとぢハとぢハとぢハとぢハとぢ

千五百の草花がくれ本葉がはれうりれぬこをまをばらん

加受仲云格 今日如類 万一をづり此山をたのむゆらん けりハ疑問法の

らびけれをつけてりあ格 其例ハ 後撰ハ川よりのをりあき

人の云れ紫うむの秋れ風をまうらん 拾遺のそみぐハ何ハ

つしまつらうみづらうみづらうみづらうみづらうみづらうみづらう

きんこの地川るそま終ハやとくそま終ハやとくそま終ハやとく

の松をうきうハ下れぬれをうけたり

重也與加格 此也何加類 千載こまやゆれつぎまらうつらうまさを思ひこ

れらんも 古交うう くと足るハのをぬるまれよをありけ

とやとく山終るとも まさ万九の瀬はぬぎつをまれば即ち

省加格

ナドカ類 狭衣るど 困ふるるま 何カ類 古雜うれしきをまめ

すべてまどう何ありあどのハとぢまきてよむ例多しこれハ

あはれをそへてまきま 但鏡以末この格をすべて何の

ハとぢハ何をまはれ結ぶをんこハとぢのうりま 風雅をうへぬ松

そまかへ川の川又浮てもゆらんハとぢのうりま 日秋たぐぬ

きうけハとぢのうりまハとぢのうりま 後撰をらぬをうりの

とぢハとぢのうりまハとぢのうりま けあるをせまらうりハとぢ

とぢハとぢのうりまハとぢのうりま けあるをせまらうりハとぢ

加結辞格

久於後撰をきりあよそてぬ 包志終 新勅たの免うかまき

万ノ類 子載小類 万更ぬり 万子

奈武類 万ハ々め 万る 万ちり

加属合助辞 万一よりひおきてり 万のまゝとちなり 万のまゝとちなり

登加類 万三海士とく 万んた

互加類 新古のいれまきとてり 互

加波類 古物名いくそたび 加

加也類 拾遺まわたりや 加

合助辞省加 登類 古意ぬれとよ 合

万ノ類 古意々ぬと 万いん 万の

奈武類 新古今うきく 奈武

加属合助辞 万のまゝとちなり 万のまゝとちなり

登加類 古地名法をり 登

互加類 千載いうみうて 互

加波類 古意ぬれとよ 加

加也類 拾遺まわたりや 加

合助辞省加 登類 後撰いづくとして 合

學而夫子之求之也其諸異乎人之求之與按之字是第
二能格與我字應接也字是第一能格而章句係疑問法
故將與字押之 雍也赤之商齊也衆肥馬衣輕裘按之
字與適字應接也字與衣字應接

與字法
矣字法
夫字法

孰字法

尹三能主格

此そのわくを尹三能主格とて 結辭はせて 結

能格の三等おわうれて 結辭のつと 西にハわが皇國云々限

ぬとハ者字之字とのけぢらこそあゝの三等ハえわうこ

ぶと三等のひをハ雅語の結辭とてハ大うとヤとひを

許曾受体言 大國主許曾 記上やち布この神のみらくやあが 衆富久遠奴斯許

乃とたわちびわうくされつまのぬせ良米

重許曾格

深許曾色尔許曾類 後格 ありさこそ其の衣ハあまのうめ候ハか

きバのこそこの何のたすバのこそこそ志まればなるやど

許曾結辞格

許曾結辞格 言はるるをふちも遊ばる

世に堀川るそあつろのすくに

互類

新古のさう候いなきも

神類 古春いろこそそと

閉

後撰おつれば神こそあ

免後撰ふ菜ハつぎと

よみとて己抄をたあめ 万十

礼類 後撰がなドらぎきの枝

之命早ハカヒケメハ非じ

現類 仁徳紀あつたそ二重

君を修りつれ 又後の

天智紀あつたそ

抄ハ修ベキ 又十一のうが

駿河紀あつたそ

とゆ結ぶ 又十四のうが

志加類 拾遺人志ま

過志類 後撰時命とくも

ひそり

良志類 古難ぬきささる人

又万六長いべこそ

志加類 拾遺人志ま

金紫たのびきバ

新古さよ子

許曾上省婆念古曾類

あらため

しき

許曾合助辞

あ

ニ許曾類 古来ありと名は 登許曾類 上よりゆ

乎許曾類 上よりゆ 且許曾類 上よりゆ

すべて合助辞といふは、能格のはもそのやうに格と所格此のふ

合辞省許曾 志毛類 万十八也、あを志毛、口、ちやふくを、みまひひつぎに

人、の、さ、ら、る、れ、ば、さ、ら、る、こ、を、依、て、さ、く、さ、の、う、く、に、

爾類 万十七、あがいのちもたがせめおされ、このおの下もコ

省結辞許曾 間類 万十一、きのふ、見て、あ、こ、

耳許曾類 古志、こを、あ、ひ、ら、ん、

ハ、也、へ、ど、く、め、か、る、と、こ、を、

吹、ひ、ま、あ、ら、ば、ま、む、く、ま、い、ま、さ、の、

許曾結轉変 祢轉、爲、受、類、千、載、も、が、こ、を、

祢轉、爲、波、也、千、載、よ、そ、く、い、と、れ、ぬ、り、を、

開轉、爲、布、類、續、古、志、こ、を、入、の、

金、幣、の、一、へ、ハ、丹、を、の、こ、を、さ、か、め、

能主失格 許曾不調類 後撰、の、を、ら、て、あ、こ、を、

許曾結失格 波誤作也、良、武、類、子、を、

中、の、同、途、の、ハ、受、の、を、こ、を、

あり、け、こ、ハ、接、續、の、で、ま、て、

す、べ、て、帝、尔、乎、波、の、と、の、へ、ハ、

と、書、紀、と、い、の、を、終、り、長、短、合、

の、ち、あ、ど、の、中、に、て、其、格、を、

○取役格才四

取役格ハ、伴云此下につきてりぬと云はてふをばあれ
其上子取伴云取役の格あるるく心小説辨丹詔
拈對兒相你こり辨相把の三字ハ、子取役格ふあれ也又万
四法考てま一の目今ぞ悔しきばのの、下ハ刊を流て置く
乎受伴云格覺目類 古秋山里ハ秋て替あくに日び一と體麻の倍多に覺をさ

古秋ひとりとのをがひるよりハ、ぬ助家あがをむ富に極て足ま
をばをハものをのま心 又秋のまきあふりたりハ、りざし
てん、さよりさ記とあ、ぬ、あ、を、を、ハ、あ、の、を、を、さ、心、又
日冬、を、を、さ、ふ、る、へ、の、ま、さ、で、く、ば、を、ハ、判、通、り、
誰、見、折、山、櫻、類、古、春、ふ、れ、も、と、め、て、を、り、つ、前、其、が、を、み、ま、く、
玉、屑、賈、嶋、が、句、の、棹、穿、波、底、月、船、厭、和、中、天、と、あ、る、を、上、左、日、記、み、む
べ、も、む、り、し、の、を、の、こ、い、さ、ち、ハ、り、が、り、子、と、此、う、へ、の、つ、き、を、あ、ぬ
ハ、を、そ、ふ、り、と、の、う、ち、れ、ろ、う、成、と、ハ、の、ひ、ん、と、か、く、ま、さ、り、こ、
此、格、と、同、じ、ま、古、意、こ、い、く、ハ、下、を、か、あ、へ、後、拾、ち、り、の
か、そ、う、い、あ、り、と、と、を、れ、古、秋、立、と、多、り、足、て、を、流、ら、ん、是、ら、れ、
み、を、と、を、て、を、ハ、判、属、の、合、助、辞、心、又、万、四、波、を、と、吾、を、と、云、さ、五、

學而使民以時 又吾日三省吾身 孟荀傳、美意、觀色 張丞、高
帝方擁威姻 才二取役格 八佾問、社於宰我

○取奪格才五

取奪格ハ、伴云此下につきてりぬと云はてふをばあれ
其上子取伴云取役の格あるるく心小説辨丹詔
拈對兒相你こり辨相把の三字ハ、子取役格ふあれ也又万
四法考てま一の目今ぞ悔しきばのの、下ハ刊を流て置く
乎受伴云格覺目類 古秋山里ハ秋て替あくに日び一と體麻の倍多に覺をさ

取奪格ハ、伴云此下につきてりぬと云はてふをばあれ
其上子取伴云取役の格あるるく心小説辨丹詔
拈對兒相你こり辨相把の三字ハ、子取役格ふあれ也又万
四法考てま一の目今ぞ悔しきばのの、下ハ刊を流て置く
乎受伴云格覺目類 古秋山里ハ秋て替あくに日び一と體麻の倍多に覺をさ

取奪格ハ、伴云此下につきてりぬと云はてふをばあれ
其上子取伴云取役の格あるるく心小説辨丹詔
拈對兒相你こり辨相把の三字ハ、子取役格ふあれ也又万
四法考てま一の目今ぞ悔しきばのの、下ハ刊を流て置く
乎受伴云格覺目類 古秋山里ハ秋て替あくに日び一と體麻の倍多に覺をさ

取奪格ハ、伴云此下につきてりぬと云はてふをばあれ
其上子取伴云取役の格あるるく心小説辨丹詔
拈對兒相你こり辨相把の三字ハ、子取役格ふあれ也又万
四法考てま一の目今ぞ悔しきばのの、下ハ刊を流て置く
乎受伴云格覺目類 古秋山里ハ秋て替あくに日び一と體麻の倍多に覺をさ

未過用云

借勝往言摘成
 聞 借 勝 往 言 摘 成
 卽ハ居トナラニ
 受ル辞トナル

未過格

未過格
 五バ
 七
 ども

去より現在より、
 是ハすべて才三能格の
 條ハさして切々
 語の法ハ
 續云に同じ
 四又十二思ハ
 一天地もより
 二ハ居ナガラ
 三ハハ思ハ
 四又十五ハ
 五ハハ思ハ
 六ハハ思ハ
 七ハハ思ハ
 八ハハ思ハ
 九ハハ思ハ
 十ハハ思ハ
 十一ハハ思ハ
 十二ハハ思ハ
 十三ハハ思ハ
 十四ハハ思ハ
 十五ハハ思ハ
 十六ハハ思ハ
 十七ハハ思ハ
 十八ハハ思ハ
 十九ハハ思ハ
 二十ハハ思ハ

未過助辞格

計	世	互	計	閉	免	延	礼	惠
姉ゆかり		ま	あ	あ	あ	あ	あ	あ
をい		をい	をい	をい	をい	をい	をい	をい
をい		をい	をい	をい	をい	をい	をい	をい

古哀傷つひ
 神ととり
 詞と志
 五又十七
 封禪書時去時來
 則孝出則弟
 則風肅然

未末助辞格		受	傳	石奴
加	計	尔		きく
左	世			きよ
多	志			
奈	世			
波	知			
万	互			
也	尔			
良	比			
和	美			
	伊			
	利			
	章			

叫		万志ま		婆		願奈武	
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願
め	子	ま	ま	セバ	セバ	武	願

万十七、七れどありあきん 又そこもあうあうこのお八むめて
 ちさハチ不飽まり
 同ハきぬとう いをを 十二たが各ふりあうも 十四今ハハ
 ぬをを 二よ替りのと見てやロくくも 千載人もがをんせも

下巻未末格

〇二十四

矣耳焉也者決辭也此附柳子堅言耳至清唐翼脩著作文譜乃引梁
 素治曾虛字用法以也矣等字是與由此是以等字相為接應者判哉
 等是與蓋等字相為接應者不可誤也然如謂固如此判判字與順
 用辭呼應謂蓋反其本矣矣字與逆用辭呼應則未必唐氏之說也蓋
 助辭與順用辭對照則從順歇與逆用辭對照則從逆歇其順歇者多
 屬現在過去逆歇者率係未來助辭用法不過如是矣學人取津繩于
 此或免把筆徐困于助辭者再
 いまゝたこゝに附して初學の輩は先づ見る後人うごひあ
 らばあつたをてよ

用言三世能所中合図

現在			過去			未來		
能	所	中	能	所	中	能	所	中
うごりも	うごりさる	うごく	うごりさる	うごりさる	うごりさる	うごりさる	うごりさる	うごりさる
動之	被動	自動	自動之矣	嘗被動矣	嘗自動矣	將自動	將被動	將自動
動之則	被動則	自動則	先是既動之矣	先是既被動矣	先是既自動矣			

以上用云助辭三格

附録依語法歌文例

筑と根 各稱実の所生 統稱実よ 下此み子此川の續
 各稱実伴云このみ子此川の下に同等形容云此のを省きたり 統稱実よ
 能主格ゆては一 積 過去活て過去 統稱実よ 所多格小 成り 過去活
 過去格早ぬと曰くオニ統格の統稱シを子ハち民シをての言ハ統と根
 乃峯よ下居るみ子此川のぬくに云積て淵はなりぬといへるなり
 學而 學ハ過去活用云 時習之 時ハ時令形容云 習ハ現在活用云 之ハ不亦
 格亦ハ合 說乎 復習之莫不也 有喜悅處麼といへるなり
 格亦ハ合 說乎 復習之莫不也 有喜悅處麼といへるなり

三都
發行
書肆

京都

三條通柵屋町

出雲寺文次郎

大

心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

心齋橋通博勞町

河内屋茂兵衛

日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

淺草茅屋二町目

須原屋伊八

日本橋通二町目

山城屋佐兵衛

女神明前

岡田屋嘉七

同

和泉屋吉兵衛

下合御成道

英文藏

芝飯倉四丁目

萬屋忠藏板

戸



